大正・昭和前期の舞踊教育(Ⅱ)

― 戸倉ハルとその時代 ―

松本千代栄
○岡野　理子
中野　祐子

1. はじめに

これまで戸倉については，松本,[1] 桐生[2]らがその業績にふれ，童心豊かな，ロマンティックな詩情に溢れた作風を持つこと，運動会などに全国多くの人々によって踊られた大集団でのダンスを創作していること，変動期にダンスの教育的価値を説き，これを守りつづけたことなどを指摘している。

本研究では，変動の時代を踏まえた戸倉ハルの活動とその作品を考察・分類し，また同時代に生きた人と比較検討することにより，その舞踊発想と表現特性を探ることを目的とする。

方法は，文献考察を主とし,[3] 映像分析を加える。

2. 作品傾向

年代順にまとめた主要作品は総数363作品（幼稚園・小学校297，中学校・高校66）であり，多岐にわたる数多くの作品が残されている。特に幼児・児童を対象とした作品が多い。

大正から昭和10年にかけては，「人形」「ブランコ」「汽車ぽっぽ」「くりくりおめめ」「ぱらぱら小雨」「ころころ蛙」など，平易な，子供達の生活に根ざしたものに材がとられ，また作詩者に，葛原𪜈・野口雨情・浜田広介らの名がみられる。

昭和11～20年になると，「愛国行進曲」「海ゆかば」「くろがねの力」などの時代を反映した題が加わる。

わらべうたや「荒城の月」「春の海」などの有名な歌曲にあわせて振付けされたものが多くあり，戦後は「花笠おどり」「佐渡おけさ」「黒田節」「よさこい節」のような郷土民謡を生かした作品が見出される。

この時期につくられた唱歌遊戯の歌詞をみると，明治期の道徳観を背景とした難解な歌詞[4]に比べ，「ねんねして[5]」（人形）とか，「シャボン玉飛ばそ[6]」（シャボン玉）など，やさしく自然でロマンに溢れたものをとりあげており，その歌曲にあわせて振付けされた作品は，当然，やさしくロマンティックな方向にむかうものであった。

3. 作品分析

具体的に歌詞と動作から作品を考察すると，例えば「人形」では，「わたしの」という歌詞で「左手を体前に取り，お人形を抱いた様子をする[7]」，「よい人形」で「右手を上下に動かし，お人形を撫でるふりをする[8]」，「愛らしい」で「両手を腰に取り，頭を静かに左右に屈げながら，可愛いお人形に見とれている心持を表わす[9]」ように振付けられ，歌詞と動き（イメージ）の一致がみられる。他にも「汽車ぽっぽ」では，「煙をはいてかけてゆく」の歌詞で「体前で手を握り，パッパと開きながら，だんだん上に差し伸べ，機関車から煙を吐き出す様を表わす[10]」など，「いちばん蝉」では，「みんみんとおくで」で「右手を耳にあて，物を聴く姿をしながら[11]」などの例があり，この期における戸倉作品（以下作品H.で示す）のほとんどが写実的な傾向をもっている。

同時代の赤間雅彦の作品（以下作品M.とする）にも，「兎の電報」の「ピョンピョコ兎が」という歌詞で「両手を頭後より頭上に掌を下にして伸し長い耳を作る[12]」，「日向葵垣根を」で「両手を体前に出し，輪を作って花となす[13]」などの振りがあり，幼児・児童対象の唱歌遊戯が歌詞を表すという表出的姿勢に立っていたことがうかがわれる。

比較すると，作品M.の，「郵便物をさし出すが如くする[14]」「戸を叩くが如くする[15]」などに対し，作品H.は，「お人形に見とれている心持[16]」「シャボン玉の消え失せて失望した感じを表わす[17]」などのように，情感的であり，「詩の心を表現する[18]」ことを大切にしていたことが感じとられる。

重ね図（図1.）で示されるように，動きは，軀間がほとんど変化せず，腕（手）や顔の向きなどによって主に表情がつくられている。作品M.についても同様であり，この期の動きの特徴，ひいては時代の舞踊技術性を示すとも言えよう。

女学生を対象とした作品のフィルム分析[19]による腕の動きの軌跡をみると，「美しき天然」は速度がゆっくりであり，後につくられた「荒城の月変奏曲」は，なめらかさでは同質でありながら，速度ははやまり，技術的にも複雑化していることがうかがわれる。（図2）

幼児・児童対象の作品構成では，動作が歌曲の小節で区切られていることがわかり，歌曲との関連がここでも明白に示されている。

大正・昭和前期の戸倉ハルの作品は，幼児・児童対象の唱歌遊戯が歌詞と密接に結びつき，歌意を舞踊発想として作品がつくられている。

戸倉は，「唱歌遊戯は，生徒児童の自然の活動性に適応して，唱歌に伴なう表現的動作に依り，全身の発育と健康とを助長し快活な精神を養うを要旨とする[20]」「唱歌遊戯及行進遊戯は音楽の伴

う全身的動作に依り身体の発育と健康とを助長し容姿を端正にし動作を優美ならしめ兼ねて快活温雅な精神を養い以て心身の調和的発達を図るを目的とす[21]」と，要目の精神に則って述べている。

これは，赤間の「唱歌遊戯及行進遊戯は(中略)優美と閑雅な姿態を作り，快活に且つ高尚な情操陶冶をする（中略）舞踊は人間界に於ける自然本能の外部的に表現したもので，最初の芸術である。（中略）故にダンスは人類の内的思想・感情を劇的形式に由って表現せしめる身体の動作をもって成立する[22]」という論と比べると，両者共に教育的価値を重視しながら，戸倉がより体育的見地に立ったとらえ方をしていると言える。

しかし作品をみると，戸倉は，「雪」で，「雪やこんこ　あられやこんこ……」の歌の吟味として，「(1)の歌は，しんしんとふる雪に山も野も真白に変り，花の林のように枯木にも美しい花が咲く様子を歌い，(2)の歌は，ふりやまぬ雪に，犬は子供と元気にとびまわり，猫は老人のようにこたつで丸くなるこの対象に依って，雪の感じを一層深くあらわしたのであろう。この詩の生命は，『ふってはふってはずんずんつもる』『ふってもふってもまだふりやまぬ』のところで，空いっぱいに花びらのように散ってくる雪の美しさで，活動的なところに一種の魅力を感ずるものである[23]」と，そのイメージを動的にふくらませている。

また「寧楽の都」では，「奈良のみやこのそのむかし……」の詩の吟味を，「(1)の歌は，青丹よし奈良の都は荒れ果てゝ，加藍徒らに古の名残を止む。龍田川原の紅葉は，今も昔とかわらず千しほの色に染めている。星霜幾変転，栄枯盛衰の世の姿をしみじみと感じさせられる。（中略）(2)の歌は，かつての大君のみゆきを今か今かと待ちわび顔の其の花は今も昔とかわらず色香をそえている。『さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな』と平忠度が西海に落ちゆく時歌い残したこの歌は，凡そこの詩の心であろう[24]」と，その詩情を深く解そうとする作舞姿勢を示している。

即物的なものにとどまらない，情感豊かで細やかな歌の心の表現は，つまりはこのような作舞姿勢と舞踊発想に基くものと思われる。

注(1)　松本千代栄「日本における学校ダンスの歩み」――故戸倉ハルを偲んで――P102～9　「日本女子体育連盟20年の歩み」のうち　S.50

(2)　桐生敬子「昭和前期〔女性体育の定着〕戸倉ハル」P240～59　女性体育史研究会編「近代日本女性体育史」のうち　日本体育社S.56

(3)　主要対象文献

① 戸倉ハル「唱歌遊戯」　目黒書店　S.2・6

② 井上武士・戸倉ハル「最新学校唱歌遊戯第9輯」　日本唱歌出版社　S.6・8

③ 戸倉ハル「幼稚園に於ける唱歌遊戯」P1～29　田中・寺沢編「師範大学講座　体育第11巻」のうち　建文館　S.11・3

④ 赤間雅彦「童謡遊戯と体育ダンス」　ささや出版　T.14・10

⑤ 同上「理論実際　唱歌遊戯と行進遊戯　浅見文林堂　S.2・6

⑥ 赤間・石橋蔵五郎「教室内の体育と遊戯」中文館　S.4・3

(4)　松本千代栄・香山知子「明治期の舞踏的遊戯――その精神と技術の様相――」　舞踊学第4号　S.56　P5～7

(5)～(7)　対象文献①　P2，P3，P4

(8)～(9)　対象文献②　P2，P54

(10)～(13)　対象文献⑤　P101，P102他

(14)　対象文献①　P4

(15)　対象文献①　P63～64

(16)　第6回国際女子体育会議（S.44）において発表された「美しき天然」「荒城の月幻想曲」の2作品について分析　16mmフィルム

(17)　対象文献③　P3

(18)　戸倉ハル「唱歌遊戯及行進遊戯教授上の注意」女子と子供の体育1巻6号　S.11　P5

(19)　対象文献⑤　P1，P9～10

(20)　戸倉ハル「雪」　女子と子供の体育4巻2号　S.14　P30

(21)　同上「寧楽の都」　同上3巻9号　S13　P46

図1.　写真の重ね図による分析

作　品　H.　「唱歌遊戯」（S.2.6）

図2.　フィルム分析

片手の軌跡　7.5sec.（点の間隔は1/2sec.）

(1)　美しき天然　　(2)　荒城の月変奏曲